



◎政府インターネットテレビ『徳光・木佐の知りたいニッポン～守りつなぎ広める日本の心 和食』で和食器の給食、出前授業の様子が放送されています。

女子栄養大学短期大学部非常勤講師
資源と環境の教育を考える会『エコが見える学校』
関東学院大学非常勤講師
三信化工株式会社

海老原誠治

えびはら せいじ

佐賀大学物理学科卒業、佐賀県立有田窯業大学校・常勤講師を経る。

広く分布する、生きた教材

西町筏通りから堀川運河を越え、材木町へ掛かる橋を、かつて筏を引いたポンポン船（チョロ船）がくぐり抜けていました。江戸時代から主要産業として飫肥杉の出荷で栄えた油津港（宮崎県日南市）の情景ですが、これは全国各地で見られた風物です。

風物詩から見えるもの

古い器の絵柄を見ると、天候・季節のうつろい、花鳥風月、雪月花、松竹梅・鶴亀などの縁起物、幾何学模様、抽象的にデザイン化された植物、身近な生活用具など多岐にわたり描かれますが、人びとの暮らしや風物詩も少なくありません。その中でも、筏流しが描かれた絵皿は多く目にします。

木材は、家や造船などの建造物の資材だけでなく、燃料としての薪など生活において不可欠な物でした。ですから、筏流しも、木流し・木遣りなどともいわれますが、荒川・保津川・吉野川など多くの場所で行わ

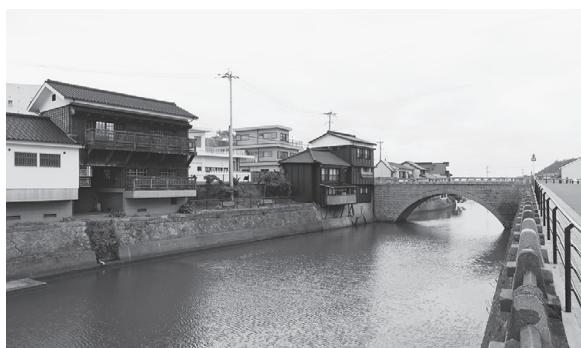


◆筏流しの絵皿（写し）

れ、記録も容易に見つかります。

かつての産業を彷彿とさせる「材木町」という地名も多く存在し、少し調べると現在でも30以上はありました。都内では駅名としても存在する「木場」「新木場」、河口に材木を浮かべ保管する集積地であったことは広く知られます。

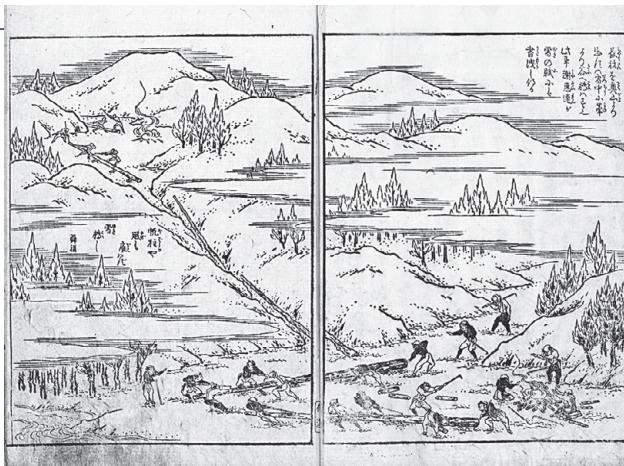
この木場、河口にだけあった訳ではありません。川の上流で木を伐採し筏流しをするため、山中にも材木の集積所が存在していました。実は、その場所も【キバ・コバ；木場】、時には【コバ；古場】や【キコバ；木木場】とも呼ばれます。地名が教材になることも、少なくありません。



（宮崎県日南市）



◆堀川橋をくぐる筏の情景が描かれた街（宮崎県日南市）



▲たき火で暖を取りながら木を伐採する様子
(拾遺都名所図会, 1787年)

さて、筏流しが好まれて絵皿に描かれていたのはなぜでしょう。筏流しは、冬に伐採した木材を、雪解けで水かさが増す春から、夏・秋を通じて行われたといいます。ですから筏流しが身近であった人びとにとって、その始まりは緩んだ気候の象徴であったともいえます。このように器の絵柄には、広く日本に共有できる、生活・産業・価値観が隠れています。

【いただきます】の生きた教材

油津港にはこんな話も残ります。江戸時代に、海が荒れて漁ができず、飢えて困っていたとき、鯨が打ち上げられました。この鯨により人びとは飢えをしのいで救われたといいます。ただこの鯨、母鯨で、胎児を宿していました。人びとは胎児には手を付けず、また、ずっと見守るようにとの想いからか母鯨の目玉と共に葬ったといいます。実は、この時に建てられた江戸時代の「鯨魂碑」の確認が油津を訪問した目的でした。

「【いただきます】」の成立は明治ごろといわれますが、背景にあるアニミズムや【合掌】につながる生きた教材として筆者のお薦めは、鯨供養・鯨塚です。沿岸部限定となりますが、比較的全国に分布しており、



▲上流にある材木の集積所 (木場・古場)



▲保津川の筏流し (京都府)

簡単に調べても100以上確認できます。また鯨は、食べるだけでなく、その油を害虫駆除に用いるなど、山間部でも農業を通じて重要な意味を持ちます。

文化と、食・生活の教材は、さまざまに存在しますが、現在ならインターネットでいくらでも調べることが可能です。折に触れて確認・蓄積していますので、【生きた教材】として少しづつ共有したいと思います。



▲鯨魂碑
(建碑以慰鯨靈魄)
(宮崎県日南市油津港)